

Tập thơ “khởi đi từ Palestin” của Giáo Sư Hideo Takeda



Từ trang 162 đến trang 179 có 4 đoạn thơ viết về :“Nhà Sư Phật Giáo Việt Nam Thích Như Điển”được nhà xuất bản Sunagoya phát hành tại Tokyo, Nhật Bản vào ngày 21.2.2020 ấn bản lần đầu.

十六 越南僧 釋如典師

ベトナム  
チウク・ニョー・ダイエン

(一)

穏やかな人柄で 語学好きな  
レ・クオンさん

釋如典という佛名をもつ僧侶

東西冷戦下の西独逸に留学

ポート・ビーブルのため

ハノーバーに 独逸最初の

越南寺院を建立した人物

一九七六年（サイゴン陥落の年）  
ヴェトナム戦争末期に遡る。

越南統一仏教徒会議は

若い有望な僧侶を海外に派遣し  
彼は日本に來た 上野駅構内で

僧衣の彼に声をかけたのは

八王子のN宗の住職だった

クオンさんを寺に住まわせ

日本語を正しく習得させたいと

八王子の大学三年に編入学させた

僕は文学部の兼任講師で

現代文学と新たに日本語も担当

教室で彼に初めて会った

越南人留学生三名の教室に入ると

軍人とコミュニニストが口論し

クオンさんは黙って聞いていた

教育学科生の彼は英語 仏蘭西語  
漢文に通じていた

父が漢文の教師と後で聞いた

やがて彼ひとりだけの授業になり

O助教授と彼とで手がけた

『ベトナム民話集』第二集の

日本語訳を引き継いだ

寺では掃除 読経 法事を

手伝い 彼は熱心に働いた

手製の越日辞書カードは

AとF項まで進め

独逸語の独習も始めていた

四年次には教育実習を済ませ

都の教員免許「英語」を取得し

卒業前に仏教系大学院と

西独逸留学生試験に合格し

ハノーバーの大学院を選んだ

当時 西独ボン政府は

越南人ポルト・ビープル

約二万六千人を受け入れ

(うち約二万四千名は仏教徒)

住宅と職を手厚く世話していたが

精神的ケアには苦慮していた

彼は留学二年で

日本に戻るつもりでいたが

僧としてポルト・ビープルのために

役立とうと 自ら定住を決意した

(二)

一九八七年夏フィレンツェ滞在中

僕はクオンさん訪問を思い立ち  
ハノーバー駅に到着した  
構内のインフォメーションで  
電話番号と住所を確かめ  
行き方を教えてもらった  
電話するとクオンさんが出た  
「法事がこれから始まる  
駅に迎えに行けないので  
お寺で待っていて下さい」  
住所を書いたメモを片手に  
僕は駅前から市電に乗った  
目的地の停留所に気づかず  
野中の終点に降り立った  
傍らの電話スタンドから  
もう一度電話し 行き方を確かめ  
折り返す電車に乗り

訊ね尋ねようやく迎り着いた  
彼が創建した越南寺院は  
ここではバゴダと呼ばれていた  
州政府から廃工場を貸与され  
内部を改装した仮寺院で  
「円覚寺」の表札を掲げていた  
案内を乞うと 僧衣の彼が  
笑みを湛えて現われた  
日本留学生時代から教えて  
一〇年余の時が経過していた  
天井の梁は工場時代を思わせた  
広い板張りの床の奥に  
金色の阿弥陀如来坐像が一体  
眼に入った  
円覚寺に僕は一泊させてもらい  
彼の活動ぶりを 親しく

見せてもらった

大学生 ボランティア 教名

賄いに通う 中年の 婦人がいた

弟子の 僧は見当らなかつた

夕食後 曜日ごとに

仏典 読経 楽器 日本語を

学生たちに 教えていた

この夜は 彼らの 希望で

僕への 質問という ことになった

クオンさんの 通訳で

日本の 教育制度など

夜更けまで 質問を受け

台所脇に 置かれた

狭いベッドに 横になった

片隅には 印刷機があり

新聞の 発行 発送もしていた

棚には頻繁ひんぱんに移動する同胞の

「住所カード」があった

早朝 車のエンジン音で

目を覚ました

ミュンヘンから遠路

法事のために迎えに来た

この日ぼくは、ミュンヘンに戻る

信者の車に便乗

駅に向かう途中

王宮庭園に案内された

釋如典師は歩きながら

園内の人々を見て

「独逸人は朝夕ともに

みな散歩を楽しむ人たちです」

「独逸の標準語は

ハノーバーの独逸語だそうです」

と教えてくれた

(三)

それから一五年後の

二〇〇二年夏

家人を伴って独逸旅行の途次

再びハノーバーに

釋如典師の寺院を訪ねようと

ベルリン中央駅から

バゴダに電話をかけた

通じない 先ずは訪ねるに如かず

慌しく列車を探し乗り込んだ

ハノーバー駅で降り

構内の観光案内所で

バゴダの電話番号を訊ね

今度はすぐに通話できたが

「Mr.レ・クオン」では

やはり通じない 市電と徒歩で

うる覚えのバゴダに着いた

驚くほど周囲は変わっていた

道は拡幅 歩道も整備され

近くにはホテルが二棟建っていた

白い塀に囲まれた

「円覚寺」は今や堂々たる

本格的な寺院に変わっていた

塀の内には鐘楼・仏塔も見えた

本堂横の玄関で案内を乞い

出てきた若い僧に

「レ・クオン氏の昔の友人で

日本から会いにきた」

念のために日本から持参した

釋如典師の写真二葉を取り出し  
彼に見せると

「オー・マイスター！」

師はいま法要中　すぐ終わるので  
お待ち下さい」と言い

僕たちを本堂に招じ入れた

暫らく待つうち

奥の薄暗い戸口から　怪訝な顔で

長身僧衣の彼が　近づいて来て

すぐに僕たちと知り

不意の訪問に驚き　喜んでくれた

応接間兼執務室に導かれ

改めて久闊を叙し　歓談後は

十数人の参観者と臨時の

夕食の卓に着くように言われ

席に着くと　思いがけず

日本人の女子大学生がいて  
互いに驚き挨拶を交わした  
語学研修でこの市に滞在中という  
独逸語学科の学生だった  
翌朝食から 僕たちは  
越南 独逸 米国人の僧 尼僧  
修行者たちとの食事に連なり  
(終始沈黙のしきたりで)  
野菜のスープ 春巻き 煮豆に  
ご飯 ゴマ団子 西瓜など  
越南式の精進料理を供された  
正面の尼僧が微笑を浮かべ  
手振りで僕たちに  
デザートの西瓜を勧めてくれた  
食後 五分ほど離れた  
市の庭園用貸地へ散歩に出た

薔薇の垣根に区切られ

左右の庭園は隅々まで

手入れが行き届いていた

釋如典師の苑内には

小さなあずまやがあり

朝の陽を受けて窓硝子が

キラキラ光っていた

林檎がたわわに実る枝から

ふたつ挽ぎ手渡しながら言った

「定年後は、いつでも

心おきなく滞在して下さい」

「今日は珍しく予定が無いので

ハイデルベルクに似た古都に

ご案内しましょう」

僕たちは厚意に甘えることにした

昼前 印度から帰省中の弟子が来た

その学生の運転で

ヒルデスハイムを訪れた

ハンザ同盟で栄えた市の中心街には

一七世紀の年代を掲げた

歴史的建造物が並んでいた

中世に僕は迷い込んだ気がした

街なかのカフェで 釋如典師は

自分は僧侶なので子を持たない

かつて同胞を扶けるために

博士課程進学を諦めた 代りに

向学心に燃える越南青年教人を

海外留学させ援助している

この数年は 越南仏教の国際的

コーディネーターを務め

「いま一番ほしいのは時間です」

と打ち明けた

手帳を開くと 数年先まで

びっしり予定が記入されていた

唐突に訪ねた僕たちは奇蹟的に  
僥倖に恵まれたことになる

「明日は この弟子の運転で

デュッセルドルフまで送ります

同市内で法事を行います

見学はどうですか？」

僕たちは参観を申し出た

(四)

朝暗いうちに 僕たちは

師と僧衣の弟子五人と

ベンツのワゴン車に乗り込み

アウトバーンを走った

前方に坊主の頭が六つ  
車のパウンドのたび 上下に  
揺れるのを後部の座席から  
眺めていると  
香港映画を見ているような  
奇妙な錯覚に襲われた  
車が急停車し 僕は眼を醒ました  
デュッセルドルフ郊外に着いたという  
迎えの人々が民家から出てきた  
茶菓の接待を受け 二階に移動  
広間を埋めた信者たちの間に入り  
釋如典師一行の司式 読経を  
見学拝聴した  
応接間に戻ると 用意した卓に  
次々と料理が運ばれ  
僕らも供応に与った 中庭では

法事後の宴が催されていた  
予定したデュッセルドルフ駅発の  
時刻が迫り 一行と車に戻った  
車は市内のビジネス街を抜けて  
五分前に駅に滑り込んだ  
釋如典師と弟子に挨拶し  
僕らは改札口に駆け込んだ

釋如典師の越南への出入国は？

私はまだ越南には入れません

越南国内の仏教の現状は？

政治支配下にある仏教なので

私達とは別の仏教です

「大乘」だいじょう「小乗」しょうじょうについては？

私に「大乘」「小乗」の別はなく

私は「仏乗」です

寺には小乗の信者のためにも祈りの  
部屋を用意しています 数年前には  
ダライ・ラマ師が見学に見えました

バーデン・バーデンに向かう車中で  
釋如典師の言葉を反芻し 僕は  
学生時代のレ・クオンさんの姿も  
懐かしく思い浮かべていた

\* 「小乗」乗は単の意味。「仏教の創始者釈迦の入滅後約百年（前3世紀後半アーン  
ヨーカ王の没後と思われる）、仏教集団は次第に二十ほどの部派に分裂し、頌頌にし  
て壮大な論蔵（アビダルマ）を打ち立て論争を行った。  
この時代の仏教を小乗仏教といい、西洋中世のキリスト教スコラ哲学に比肩され  
る。サンスクリットでヒーナヤーナ（小さな乗り物）というが、（小乗）とは、大乘  
仏教からの貶称であり公平な呼称ではない。」（世界大百科事典①）

著者紹介

竹田 日出夫（たけだ・ひでお）

一九三五年（昭和一〇年）一月、東京生。

早稲田大学大学院文学研究科日本文学専攻（修士）。

武蔵野大学（旧・武蔵野女子大学）名誉教授。

日本現代詩人会会員、日本文藝家協会会員、NGO「地に平和」会員。

〔詩集〕

第一詩集『フィレンツェのムンク』（一九八五年一月、V I A・明治図書）

第二詩集『地中海から』（一九九九年七月、ラヴィ社）

第三詩集『井の頭公園春夢譚』（二〇〇一年三月、私家版）

第四詩集『パレスティナから』（二〇一五年八月、私家版）

第五詩集『天地人一體』（二〇一六年五月、私家版）

現住所 〒一八一—〇〇〇一 東京都三鷹市井の頭一丁目三〇番地八号

詩集 パレスティナから

二〇二〇年二月二日初版発行

著者 竹田日出夫

発行者 田村雅之

発行所 砂子屋書房

東京都千代田区肉神田二丁目四十七番地 電話〇三三二五六―四七〇八 振替〇〇二三〇―一九七六三一

URL <http://www.sunigoya.com>

組版 はあとわあく

印刷 長野印刷商工株式会社

製本 渋谷文泉閣

©2020 Hideo Takeda Printed in Japan

ISBN978-4-7904-1779-8  
C0092 ¥2500E

定価 本体2,500円 +税

